

た動機や完成までの苦心談などが、其の肖像と共に掲げられ、當日の全國諸新聞は、殆んど全部此の「殺人冷熱機」の記事を以て埋められたのだつた。

沖田義正の家は、元熊本であつたが、義正の曾祖父が屯田兵として北海道に渡つて以來、其儘此處に住む事になり、熊本にあつた山林、田畑、家屋敷を賣り拂ひ、其の金を以て北海道の土地を買ひ込み、農園や牧畜に従事したが、當時の事でもあり、其の何れも非常の好結果であつた。

而して義正の父の時代には、既に其の財産は實に貳百萬を算するに至り、北海道に於ける立志傳中の第一人者として擧げられて居つた。

正義は札幌中學を出た後、第一高等學校に入り、更に東北大學の理工科に入つたが、珍らしい明晰な頭腦の所有者であつたが、大正十三年六月、而も米國にては排日移民法案が上院に於て可決され、國家的一大侮辱を與へられつつあるの時、世界一周の名目の下に、米國の飛行機は、遙かにアラスカを超へ更に

北海を経て内地に飛來したのだつた。

米機來る——彼にはそれが普通の世界一周飛行ではなく、何等か他に眞意があるべく思はれたのだつた。

『アメリカの飛行機が、アラスカを超えて、はるばる日本に飛んで來るといふ時代になつては、吾々日本人は大いに考へなくちやならないぞ。若し一朝事ある時に、何等軍事的防備のない北海方面から、どしどし外國の飛行機や飛行船がやつて來たら、一體北海道どころか、日本全土はどうなるだらう。』

斯くの如き考へがふと彼の念頭に起つた。其後彼は毎日さうした事を思つて見た。數日を経て或日の新聞には、海外で發明されたといふ殺人光線なるものが發明されたといふ記事が見えた。彼は愕然とした。それは彼が空想しつつある北海方面から侵入せんとする外國の飛行機とさうした驚く可き化學的威力を有する軍器とを結びつけて考へて見たからであつた。

時も時、米國大統領は排日條項を含める移民制限法案を裁可した。故にその不法なる排日移民法は同年七月一日から實施される事になつた。

然るに、彼の父正道は、排日案實施に對して痛憤し、義正に君國の爲、同胞の爲父の志を繼いで赤誠を盡せ——と言ふが如き遺書を殘し、自宅十疊の室に於て、父祖傳來の日本刀を以て美事割腹憤死した。

父の血を承けた義正も亦熱烈なる愛國主義者であつた。而して父の死は、北海道は愚か、日本全國民に一大刺戟を與へた。殊に札幌市に於ても中ノ島公園に、大通りに、對米國民大會は開かれたが、中ノ島公園に於ける對米國民大會には遠く根室、釧路方面からまでも來り會し、大いに氣勢を添へ米國の非を鳴らした。各辯士は交々起つて血を吐くの慨ある熱辯を以て米國を膺懲すべしと叫んだ。群衆は熱狂した。

此の時、一人の青年は、突如演壇に現はれた。群衆は此の紅顔の一青年が、

抑も如何なる熱辯を振ふかと破るるが如き拍手を以て迎へ、片唾を呑んで耳を澄した。

「諸君、我々は和民族の血を承けたる日本人であります。恐れ多くも 天皇陛下の赤子であります……。」

青年の聲は響き渡るが如き聲ではなかつたが、沈痛にして力ある聲であつた。群衆の拍子は高鳴つた。而して次に彼青年の唇を洩るる聲を聽かんと、再び靜肅に返つたが、青年は棒の如く佇立した儘一分……二分……三分、一語をも發しなかつた。此の時、

「憤死した沖田さんの子息さんだ。」

群衆の中の一人は斯く叫んだ。青年の兩眼からは、既に涙が流れて居つた。彼の絶句は決して訥辯なるが爲でなく、感激の最高潮に達してであつた。群衆の間にも涙をすすする音、或は歎歎の聲が起つた。青年の沈黙と群衆の沈黙は久

しい間つづいた。唯一人彼を彌次るものもなかつた。彼は棒の如き身體を演壇から静かに辯士室の方へ運んだ。此の時、堂も破れよとばかり熱狂した群衆の拍子は起つた。

其の翌日から彼の姿は札幌から見えなくなつてしまつたのである。

『世界に戦争の絶滅せぬ限りは、軍備の必要がある。而して今後の戦争は肉弾戦でなく化学戦である。』

と考へた彼は何事かを決心した。これ即ち殺人冷熱器の研究發明に没頭するの動機であつたのである。彼は此の事業のために、父の遺産の悉くを費すとも、地下にある父は、必ず叱責はすまい、却つて父は喜んでくれるであらう——と信じ、世人からは狂人と呼ばれ、乞食と哄はれ、殆んど寢食を忘れ冷熱器の發明に没頭すること〇年、其の間日米國交斷絶となり、敵の殺人光線や、種々の優れたる軍器の爲に、日本帝國の危機をさへ唱へられるに至つたので、

彼は其の完成を如何に急いだか知れなかつたのである。

三八 陸續發明された日本の新銳軍器

彼の此の殺人冷熱器の發明が公にされて十日目に再び日本全國民を狂喜せしめたものは、これも久しく發明に没頭してゐた青柳海軍中佐が、着弾距離實に二萬六千米突の海軍砲と、毒瓦斯をして無能ならしむる化學的「煙霧發撒器」の完成と實驗が發表され、更に又其の翌日は、一民間飛行士山内清雄が發明した二百八十哩の速力を出し得る「山内式飛行機發動機」が發表され、更に三日後には嘗て博士、學士其他の有識階級の斡旋によつて設立された國立發明品研究所にあつて、専ら發明に熱中してゐた豫備陸軍中尉櫻山春太郎が發明した、「飛行機高速度射撃砲」が發表された。

斯くの如く、世界的最大威力を有する種々の軍器が發明された事は、危機に

類しつたあつた日本帝國にとりては、正に天祐に値ひするものであつた。

時は米國の大西、太平洋兩洋聯合艦隊が日本の海岸に迫り、日本全土を一氣に蹂躪せんと眞珠港を出で、威風堂々、海を壓して進みつつあり——この報に接した時であつた。

日本政府は、之等の新銳の軍器を、直ちに砲兵工廠、兵器廠は勿論、全國各造船所、鐵工場に戰時工業動員令を下し、一大急速に製作すべく命じた。

砲兵工廠、兵器廠、全國各造船所、大鐵工場は、其の優秀なる技能を有する職工を督勵して、徹宵、又徹宵、僅かに一週日を出でざるに、既に新銳武器數百臺は製作され、而も完全に使用し得るに至つたので、夫等の威力は軍艦に飛行機に各々備へつけられた。

* * * * *

三九 日米兩艦隊が必死的奮戦——米國の兩洋聯合艦隊全滅

全世界を震撼驚愕せしむべき、日米戦争の一大決戦の日は刻々に近づいた。

沖田義正の發明になれる世界軍器の最大威力、殺人冷熱機をはじめとして、豫備陸軍中尉櫻山春太郎の發明にかかる飛行機高速射撃砲、青柳中佐の發明せる着弾距離二萬六千米突の海軍砲及び煙霧發撒器更に又二百八十哩の高速度を有する山内式飛行機發動機等の新銳の軍器を得た日本海陸軍は、實に全米土を呑み盡したるが如き氣勢を揚げ、殊に海軍に於ては、敵の來るを待たんより、之を途中に邀撃して、唯一氣に全滅せしむべしと軍議は一決し、是迄各港灣の守備に當れる二等巡洋艦の如きまでも狩り集め、朝霧、筑波根、富士、八彥、朝鮮、北海の各三萬八千噸級の主力艦を初めとし、八重潮以下一二等巡洋艦三

十隻、驅逐艦隊、水雷艇隊、水雷母艦、飛行機母艦、潜水艦其他海底電線切斷艦等、合して茲に九十隻の艦隊は、佐世保軍港を抜錨し、偵察機は間斷なく母艦を離れ索敵行動を執りつつ進んだ。

一方米國の南洋聯合大艦隊は、既に日本聯合艦隊が占領せしマニラ島を奪還し、海底電信事件で彼米國がケチをつけた、ヤツブ島近くにまで進んで居つた其の策戦はと云へば日本の第四艦隊と陸軍とが實に二萬三千の犠牲を出して占領せしマニラ島をも奪還し、一舉日本の海岸に迫らんとするにあつた。

俄然！互ひに一大決戦を期する日米兩艦隊は、嘗て第一艦隊が全滅せしめられたるヤツブ島附近に於て相會し、忽ちにして猛烈なる空中戦となり、敵機がエネルギー應用の射撃砲を以て迫れば、我は高速射撃砲を以て之を墜落せしめ、敵が雲隠れ式飛行機を以て、毒瓦斯を發撒せしむれば我は青柳中佐が發明せし煙霧發撒器を以て之を無能ならしめ、ひらりと燕返しに放れ業を演じて敵

機の前面に現はれ、一撃の下に射墜し、敵機が殺人光線を發射して我を焼かんとすれば我は沖田義正が發明せし、世界軍器の最大威力にして最高權威たる、殺人冷熱器を以て之を光と化せしめ、更にガンリンを凝結せしめ、發動機の廻轉を無能ならしむると同時に、其の搭乗者を凍死せしめ、飛行機と共に忽ち墜落せしむるなど或ひは礫の如く墜落するもの、或ひは蜻蛉の如く昇空するもの、飛鳥の如く斜に外れるもの、一千米突、二千米突、更に二千五百米突の空中に於て入り亂れ入り亂れ相闘ひ、洋上に在りては彼我の艦隊、激烈に砲火を交へ撃ちつ撃たれつ、沈めつ沈められつ、太平洋の水は正に天に逆捲き、砲煙彈雨は濛々として天日を蔽ひ、一大水柱は天に林立し、一彈送れば一彈來り、彼のマストを折れば我の煙筒を碎き、彼を沈めて萬歳を唱ふれば、我を沈めて奇聲を放つ、更に彼我の潜水艦は、海中に相往來して、艦底艦側其の水線下を覗つて威力を現はし、彼我の驅逐艦は隼の如く、逆捲く波に見えつ隠れつ、疾風

迅雷我敵を襲へば敵我を襲ふ、魚雷は見舞ひつ見舞はれつ、海に落ちし彼我將卒の死屍は天打つ波間に翻弄され、上甲板下甲板、到る處血塗られざる所なく肉塊はあだかも霞の如く降り雹の如く飛ぶ、彼我兩艦隊相會して火蓋を切りしは午前四時三十分、既に日は暮れたれど勝敗は決せず、夜に入りては益々激しく激戦よりより激戦へ、猛烈よりより猛烈に、甲板に積む死屍の上に積むに死屍を以てし、血の上に塗るに血を以てした。

空には稻妻の相交錯するが如き、飛行機戦。八時を過ぐる十分頃より、俄かに烈風は起つて、雨は車軸を流すが如く降り、黒暗澹たる洋上に、彼我相射り相照す探照燈。巨弾は降る雨よりも烈しく、暗を縫ふて突撃する驅逐艦、或ひは衝突、或は爆沈、般々轟々天を震はせ海床を搔がす、凄慘其物の如き光景は何時果つべくとも解らなかつたのである。

我が艦隊の將卒は、眞に國家の興亡存廢、我等の此の一戦にありとなし、奮

闘努力、遂に曉近くなるも食をとるが如き閑は勿論なく、果して味方の艦艇が、如何なる程度迄に損傷を蒙り、敵に如何なる程度の損傷を與へたか、戦友誰が死し誰が斃れたかさへも知らず、傍目もふらず戦ふうち、雨も歇み、風も風ぎ、東明に夜は明けかけておぼろに敵の艦影を見出し得るに至つた。此の時突如味方の艦隊の背面にあたり爆音凄しく空を壓して進み來る二十の飛行機があつた。

敵か、味方か……と思ふうち、其の兩翼にあざやかに描かれた日章旗、味方の飛行機よと仰ぎ見る間もなく、敵機の中を翔けぬけた味方の飛行機は、各敵艦の上空に至るや、矢を射る如く一機又一機急轉直下、敵艦に打ちつけた同時に大音響は耳を壓した。

これ横須賀にあつた海軍飛行將校、國家の興亡如何にある一大決戦に氣勢を添ゆべく、各々一機に魚形水雷を積み、米國艦隊の上空から、彼に衝突して、

肉弾と魚形水雷とを以て彼を爆沈せしめんと圖つたのであつたが、其の爲に殆んど敵艦の主力艦は千尋の海の底の藻屑となり。敵よりする巨弾は漸次薄刃となり、夜は全く明けはなれ、東の空からは、赫々たる太陽正に水平線を離れんとしたが此の時敵艦隊は如何にと見れば、主力艦をはじめ巡洋艦以下の各艦艇は殆んど其の影を洋上に留めなかつた。

而して洋上には、彼我將卒の死屍、彼我の飛行機、半ば沈める敵の主力艦、其の檣上には星條旗が、押し揉まれたかの如くなつて淋しく掲げられて居つた。我はと見れば、主力艦にして残れるものは筑波根と朝鮮、八彦のみで、旗艦たりし富士も、朝鮮も、北海も撃沈され、一二等巡洋艦は僅かに七隻を残し其他には驅逐艦十隻、潜水艦八隻、飛行機母艦、水雷艇六隻を餘す外、同様撃沈、衝突みな其の勇敢なる將卒と共に、尊い犠牲となり飛行機の如きも僅かに十機を残し其他は悉く破損沈没、其の影を没し如何に激戦に激戦は續けられ

たとは言へ、戦ひ初めてより僅かに二十四時間、日米兩國が巨億の金を投じて建造せる大海軍が、斯の僅々二十四時間にして共倒れとなつて悉く海底に沈め了つたことは、實に馬鹿氣たる事である。而し物質は贖ひ得るも、此の戦ひのために彼我兩國共に夥しき犠牲者を出したことに對しては、如何なるものを以て贖はんとするも能はざる所にして、戦争が如何に我々人類社會にとり恐るべくして最大不幸なるかは、此の海戦によつても又裏書されたのであつた。萬里の怒濤を蹴つて遠征した米國の大西洋一大艦隊を僅かに二十四時間内に、完全に全滅せしめた日本艦隊の各艦艇の檣上高く掲げられた日章旗は、さし昇る旭日に輝き、朝風に翩翩としてひらめき、萬歳の聲は天に轟き、海底をゆるがせた。

空は正に日本晴れに晴れ渡り、太平洋の波さへも、いと穩かに風ぎ渡つた。ああ太平洋の波は果して永久に穩かであつたであらうか。

空は果して永久に日本晴に晴れわつてゐたであらうか？
 おお、世界永遠の平和！ 開は果して人類社會にのぞみ得べき事であらうか？

國難
 來る
 未來の日米戰爭
 終

大正十三年八月二十三日印刷
 大正十三年八月二十九日發行

錢拾貳圓壹金價定 □ 有所權著作

著者	樋口紅陽
發行者	東京市本郷區駒込動坂町一〇九番地 樋口紋太
印刷者	東京市本郷區駒込動坂町三一七番地 社會教育研究會印刷部 小國直太郎
製本者	東京市神田區三崎町三丁目一番地 社會教育研究會製本部 秋山清吉
發行所	東京市本郷區駒込 動坂町百〇九番地 社會教育研究會 振替東京六七九參四番 電話小石川六三六〇番

附典 爭戰米日の來未 る來難國

賣捌所 東京神田今川小路 九段書房

T-47-12

もてしとのもき可む讀すらなみのるた導指好のてしと用演實の年青り獨
りなのもるたれさ定認設賞りよ省部文とりな著好るすひ價に奨推にい大

海内社文教 軍務會社育 中務局長 將省會社長
佐藤池田 鐵宏 太田 嘉壽 閣生先
下閣郎太鐵藤佐 序下閣郎太鐵藤佐
薦推生先宏 田池 薦推生先宏
序生先壽嘉 序生先壽嘉
著生先陽紅口樋

最新刊 (四版)

新案特許 分册自由
稽古其他必要に應 じ一篇毎に自由に
分册の出来る獨特 の最新考案の珍書

比... 女... 何... 影... づ... ー...

青年實演用 我等の劇 脚本集

文部省認定

白熱的歡迎

皇國の興廢は我等の郷土の盛衰にあり。我等の郷土の盛衰は其娛樂の如何にあり。我等の劇は美しき郷土藝術の表現なり。これなく我等の青年團や同志會や祭禮などの際に實演すべき劇は正にこれだ。それは我等の生活とヒツタリ合つてゐるからだ。と全國の青年が競つて實演せんとする讀めば直ぐ出来る青年劇の脚本集はこれだ。
【内容】▲全國の青年に青年劇を提唱す ▲青年劇を上演するまで ▲小作争議に明快なる解決を與へたる『村の平和』 社會劇『二人の廢兵』 諷刺喜劇『結婚後の一日』 童話劇『二つの世界』 史劇『少年の頃の日蓮』 社會悲劇『愛に抱かれて』 社會立志劇『仇に報いる』 童話劇『裸體の王様』 『人柱』の十篇にして何れも青年團、學校等に於て實演して多大の賞讃を博せるもののみにして上演の方法も詳説す。

四六大列各篇毎に上質色紙表紙附實用新案特別製本分册自由口繪寫眞入總タロース金文字函入
定價貳圓五拾錢 送料十八錢 代金引換斷

發行所 東京市本郷區駒込 九〇番四 會究研育教會社

終

